

1. 総合土砂管理における下流河道の検討の進め方について

- ・ 矢作古川への土砂の分派はどのように考えているか。矢作古川の河床上昇等を考える上で明確にして欲しい。（資料-1 p4～p6）

2. 第 2 回委員会での指摘に対する対応等について

- ・ 矢作ダム建設前においては、現在より多くの土砂が流れており、砂利採取などを行うことで安定を図ってきたと考えられる。排砂後においては、それに近い状況になると考えられることから、昭和 40 年代（矢作ダム建設前）の土砂管理状況を十分把握する必要がある。（資料-1 p14）
- ・ 土砂管理においては、いくつかの機関が関連することから、役割分担を検討する必要がある。砂利採取を前提とすることは有効であるが、将来的に継続的に利用できるかも検討する必要がある。（資料-1 p14～p16）

3. 排砂を想定した土砂動態予測について

- ・ 検討ケースの設定について、「常時フリーフロー（供給土砂条件③）」は実施不可能であると考えられるため、書き方を修正する必要がある。（資料-1 p18,p19,p34）
- ・ 土砂に係わる局所的な問題について、整備計画とのすり合わせが必要である。（資料-1 p28～p30）

4. 土砂動態変化がもたらす物理環境への影響について

- ・ 土砂量が少ない土砂供給条件②では、河床が上昇していないが、河床材料はどうなっているか。土砂供給条件②と③の間に、河床材料が改善し、河床高が上昇しない最適解がないか検討する必要がある。（資料-1 p40～p46）
- ・ 表層の河床材料がどうなるかの分析が必要である。（資料-1 p40～p46）

5. 土砂動態変化がもたらす生物環境への影響について

- ・ アユの産卵床に適した河床材料の粒径を 0.425mm～9.8mm としているが、研究者によって様々な意見がある。検討ケースを増やして丁寧に検討する必要がある。（資料-1 p54）

6. 土砂管理シナリオの立案に向けた検討について

- ・ 本委員会は、何かを決める場ではなく、シナリオとしてどのようなものがあるかを議

論する場と考えている。

(資料-1 p57～p61)

- ・ 案がたくさん出るのは良いが、どうすればよい方向に向かっていくかについては委員会で示すべきであると考え。  
(資料-1 p57～p61)
- ・ 矢作川の目指すべき姿を昭和 40 年代に見られた姿と自然再生勉強会の中で整理している根拠となった資料はどのようなものか提示して欲しい。  
(資料-1 p58～p60)
- ・ 昭和 40 年から約 50 年が経過し、矢作川の河川環境も変わってきている。昭和 40 年代の環境に戻すことにより、失われるマイナス面の評価も必要である。(資料-1p58～p60)
- ・ 河床の砂の状況から昭和 40 年頃の河川環境を目標にしているとのことだが、昭和 40 年代は水質が最悪な時期である。昭和 40 年頃を目指すことに違和感がある。

(資料-1 p58～p60)

- ・ 昭和 40 年は矢作ダム建設前であり、矢作ダム建設前に近づけるという考え方で良いと思われる。水質については、もう少し前の綺麗なものを想定しておいた方がよい。
- ・ 越戸ダムの下流に土砂を供給しないとだめなのか。明治用水頭首工の下流に持つていくことも考えられるのではないか。
- ・ 明治用水頭首工は水位を維持する必要がある、土砂を流すのは難しいと考える。費用を安く抑える方法を考えるべきで、治水計画から見直す必要もあると思われる。

(資料-1 p58～p60)

(資料-1 p58～p59)

(資料-1 p58～p59)

## 7. 今後の検討方針について

- ・ すべての区間で平面二次元河床変動計算を実施するのは不経済である。断面の特性から、どこに堆積するか推定する手法は別にあると思われる。  
(資料-1 p66～p67)
- ・ みお筋には堆積せず、水際部に堆積するのであれば、今回提示した供給土砂量より少ない量で目標とする河川環境に近づく可能性もある。  
(資料-1 p66～p67)
- ・ 明治用水頭首工下流に土砂供給が必要としているが、下流の河川環境の回復には 30～40 年を要する結果となっている。土砂管理シナリオを検討する際に、ヨシ原の再生、樹木伐採等、人為的に手を加えることにより、より早期に効果を発現させるシナリオについても検討する必要があると考える。  
(資料-1 p66)